

妊娠出産後も医師としての キャリアを断ち切らない 生き方を

私の専門分野は生殖内分泌学、いわゆる不妊症の方の生殖に関わる問題を解決することです。そして腹腔鏡手術。5～10mmの小さな穴を何箇所か開けてモニターで確認しながら行う手術で、患者さんの術後の痛みが小さく回復期間が格段に早く、傷が小さいため女性にとってはいわゆる審美性の高さがポイントです。そしてもう一つが、女性研究者や女性医師のキャリア教育です。こちらは確立した分野ではないので手探りでやっています。私が入局した頃は圧倒的に男性医師の方が多かったのですが、現在産婦人科は女性医師が7割。元々医師不足な上に、育休産休で人員が減ったら医療現場が崩壊してしまうため、10年位前まで女性医師は結婚して妊娠したら医師を続けられない環境でした。でも10年程前、産婦人科医師が逮捕されるというセンセーショナルな事件があり、産婦人科医を目指す人が激減。その時に崩壊寸前だった産婦人科医療を支えたのが、出産を期にキャリアを断っていた女性医師の復帰でした。このような背景により女性医師が増えてきたことで、少しずつ制度が整い、女性医師が妊娠出産してもキャリアを築き続けることが可能になってきたのです。

生命の誕生に立ち会っている喜び

女性医師のキャリア教育については、10年ほど前から医師会で女性医師講座をおこなっています。どうしたら女性医師が復帰できるか、復帰にはどのようなシステムや設備など必要なのか。それから復帰したあとも大切です。時短であってもキャリアを積むにはどうしたらいいか。更に40～60代になると子育ては落ち着きますが、今度は介護の問題も出てきます。私達はゴールがない中ずっと頑張り続けなければいけません。それでも辛いことよりも喜びが多いのが産婦人科医の仕事です。私達は生命の誕生に立ち会っている。生殖内分泌で様々な治療してようやく授かり、周産期に橋渡しして、そこを命がけで乗り越えてお子さんと出会える。それは本当に幸せなことなのです。

この10年で大きく変化を遂げた 女性医師を取り巻く 環境と制度

医学部附属病院 周産母子センター 教授

銘苅 桂子 MEKARU Keiko

〔略 歴〕 1999年 琉球大学医学部医学科卒業

2019年 琉球大学医学部附属病院

周産母子センター 教授就任

〔専門分野〕 生殖内分泌学

